



川の石に聞き、土と語った40年

# 吉村利美追想展 「使者の記憶」

入場無料  
スペース・デネガ  
一月十九日「金」～三十日「火」



吉村利美追想展「使者の記憶」  
～川の石に聞き、土と語った40年～

長く青森に居を構え制作活動を行ないながらも、2016年11月に逝去した陶芸作家・吉村利美の追想展。

青森の自然や風景、身近な植物や生物などからインスピレーションを得て制作された作品たちは、県外での発表が多く、県内で吉村の作品に触れることのできる機会はほとんどありませんでした。

一方、布地を用いて着色していくなどの吉村独自の技術から生まれる美しいその造形は、全国の多くの人々を魅了してきました。

本展では、初期の作品から病床に伏す直前まで制作していたものまで、吉村利美の陶芸作品を約80点を展示し、作品の移り変わりを辿ります。

会期：2018年1月19日(金)～30日(火)  
10:30～18:30 ※入場無料 会期中無休

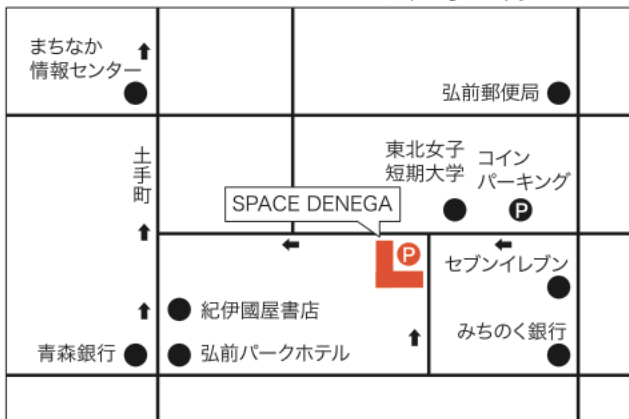
会場：スペース・デネガ / ギャラリー

主催：吉村利美追想展実行委員会

後援：東奥日報社、陸奥新報社

問合せ：harappa 0172-31-0195

SPACE DENEGA 〒036-8013 青森県弘前市上瓦ケ町 11-2  
☎ 0172-32-1794



←：一方通行 ○会場の駐車場には限りがあります

表紙作品：「立ち姿」(左)、「7つの音」蓋物(右)



「音のかなたへ」陶板

<吉村利美略歴>

1949年 茨城県結城市に生まれる

1970年 弘前大学人文学部文学科中退

1977年 茨城県笠間市に移る

1980年 青森県青森市三内に移住して  
登窯を築窯

1993年 青森市松原に移住

2015年 青森県弘前市に移住

2016年 11月死去

出品歴

朝日陶芸展、八木一夫賞現代陶芸展、陶芸ビエ  
ンナーレ特別賞、国際陶磁器展美濃、日本陶芸  
展ほか

個展

阪急梅田(大阪)、アートサロン光玄(名古屋)、  
西福(東京・南青山)、しぶや黒田陶苑(東京)、  
ぎやらりー工芸舎(東京)ほか

二人展

アスクエア神田ギャラリー(東京)ほか

グループ展

器陶小林(名古屋)ほか



制作のための道具  
(吉村の作業場にて)

## 『穴』

彼は「使者」として訪れた。

吉村利美が最初に世に認められた作品は「使者」と題されている（朝日陶芸展入選）。

細長い大型の蓋を伏せたようなフォルムの両側に、内面の炎に思える肌色が焼き付けられ、それを無数の細い黒線が幾何学的に区切っている。熱風と怜悯と決意と謙虚。それらの混交が訴える。

初期の明確なオブジェから、やがて蓋物が多くなる。それは初めから蓋物として作られたのではないだろう。オブジェを切り裂いて、その上部が蓋になる。

吉村は「オブジェは息が詰まって苦しくなる。それを蓋物にする」と、楽になった」という意味合いのことを語っていたという。傷を入れることで、息が出来る。世界と語り合うために美を持つてこの世に訪れた使者は、自由になるために自らを切り裂かなければならなかった。

吉村の蓋物は、蓋の部分が大きく、切った上部の蓋と、下部の胴体がそれぞれに深い穴を生む。吉村の作り出す穴は時と共にその意味を少しずつ変えてきた。精神的に極めて苦しんでいたときの「窓」と題されたオブジェは、細長い塔のような上部を回って窓が描かれ、その一つだけ穴があけられている。閉じ込められていた作家は、その穴から脱出したかったのだろうか。

蓋物が増えてから、吉村は様々な穴を探つてゆく。河原の小石の跡の小さな美しい穴もあれば、パオのような造形の、蓋を開けたら子どもたちや歌が飛び出してきそうな楽しい穴もある。苦しく、入れそうもない穴も。

そして吉村は、風化して石灰質になってしまったかたつむりの抜け殻を見つけ、その穴に魅せられた。大きなオブジェとなったかたつむりは、黒い穴を大きく開いているが、そこから手をいれても螺旋状の穴はすぐに手を拒む。中を見ようとしても見えないう、底の無い穴。始原の分からない穴。それは作家の内面の奥深くに入っていく穴でもあり、どこかで宇宙に通じている穴でもあるだろう。

使者はこの世に穴を開けて、逝ってしまった。私は今、その穴に沿って、彼の内面に入っていきたいと、せつないほどに思う。

梅津時比古

（桐朋学園大学 学長）



「かたつむり」



「貝」蓋物



「記憶の入れ物」蓋物



「東方より来たりし人」